

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	チベット語アムド方言来源の借用語からみた保安族におけるチベット族との民族接触
Author(s)	佐藤, 暢治
Citation	ニダバ , 25 : 28 - 37
Issue Date	1996-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047985">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047985</a>
Right	
Relation	



# チベット語アムド方言来源の借用語からみた 保安族におけるチベット族との民族接触\*

佐藤 暢 治

## 0. はじめに

「民族接触」という術語の意味は、文献により異なることが少なくない。大島(1989)は、「民族接触」の具体的な現れが「言語接触」や「文化接触」であり、「民族接触」は「言語接触」や「文化接触」を含む上位概念であると述べている。この見方に従うと、「言語接触」と「文化接触」の関係は、必然的に、異なる2つの言語と文化をもつ民族AとBが接触し、民族AがBより文化的に優位な場合、A文化の物や概念がB文化に取り入れられ、言語にはそれを指示する語が借用語として取り入れられるといったものになるであろう。ただし、取り入れられた物や概念すべてが借用語という形で受け手側の言語に反映されるとは限らず、固有語における意味領域の拡大という形で受け手側の言語に反映されることもありうることに注意しなければならない。

しかし、言語において、民族接触の状況を端的に物語っているのが借用語であることに異論はない。借用語の意味分野や借用時期などが特定できれば、2つの民族の間にどのような民族接触があったのか、その一端が明らかになる期待がある。民族史が、文字をもたないなどの理由から不鮮明な場合、借用語の存在はより一層重要である。中国の甘粛省で話されている保安語大河家方言はまさにそうした例の1つにほかならない。

本稿は、以上のような観点から、保安語大河家方言におけるチベット語来源の借用語に焦点をあて、保安族がチベット族との間にどのような民族接触を持ったのかを論じるものである。第1節では、民族接触の歴史的な位置について述べる。第2節では、資料について述べる。第3節と第4節では借用語の具体例を提示し、第3節では民族接触の形態について述べ、第4節では借用語の意味分野から文化接触の状況を論じる。第5節では、借用語の時期において若干の考察を行う。そして、第6節では議論したことをまとめることにしよう。

## 1. 民族接触の歴史的な位置

保安族(12,212人)は、主として現在中国の甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治县大墩、甘河灘などに居住している<sup>1)</sup>。モンゴル系言語の1つ保安語大河家方言

を話し、イスラム教を信仰し、生業として農業を営む。

保安族の歴史については、民族形成を始めとして不明な点が多い。そうしたなか民族史の研究に従うと、保安族が現在の居住地の積石山で暮らすようになったのは、チベット仏教徒が多数暮らす青海省黄南藏族自治州同仁県から移動してきた清代同治年間(1860年代)以降となる。移動は小集団が数群に分かれ自発的に行われたが、その要因を保安族の伝承は清代同治年間に強まったチベット仏教封建領主の圧制や他民族との灌漑用水を巡る争いと伝えている。

保安語大河家方言には、チベット語アムド方言来源の借用語が数多い。陈(1990)に従うと、保安語大河家方言の基礎的な調査語彙のうち、チベット語アムド方言来源の借用語が占める割合は、既に漢語の受容状況の違いから下位方言の間に大きな差異を認めざるをえないが、大墩の場合約17%となる。保安語大河家方言に見いだせるチベット語アムド方言来源の借用語は、述べるまでもなく、保安族が青海省に居住していた時代にチベット仏教を信仰し、生業として半農半牧生活を営んでいる周囲のチベット族との接触を通じて取り入れたものである。そのため、保安語大河家方言におけるチベット語アムド方言来源の借用語の意味分野を詳細に調査すれば、かつて保安族がチベット族との間にどのような接触を持っていたのか、その一端を探れることになる。しかし、今までのところ、この問題を本格的論じたものはないようである。

## 2. 資料

現在利用可能な保安語大河家方言の資料のなかで最も豊富な語彙を集録しているのは、現代モンゴル系諸言語の対照辞典の役割をもつ孙主編(1990)である。この資料に掲げられた保安語大河家方言の調査地点は、巻末の説明をみると大墩と記されている。見出し語としてモンゴル文語の形式が掲げられ、現代モンゴル系諸言語の欄にはそれと形式にではなく意味的に対応するものが記載されている。見出し語は2,613語を数えるが、保安語の欄には、同一形式が複数の箇所に記載されていたり、欄自体が空白であったりと、実際の総数は2,613語より幾分か少ない。

孙主編(1990)から、チベット語アムド方言来源の借用語として認定できるのは、今後の研究により数値は増えるに違いないが、今のところ330語余りである。そのうち本稿で対象とする名詞が250語余りを占めるが、借用された品詞に制限はない<sup>2)</sup>。

そのほかに保安語大河家方言大墩の資料として、布和・刘(1982)がある。この資料には、孙主編(1990)に集録されていない語が10語余り集録されている。これらの語も、本稿での対象に含めたい。

## 3. 民族接触の形態

借用語の意味分野から民族接触の状況を考察するうえで、接触の形態を示すことも重要

である。大島(1989)を参考にし、接触の形態として、ここでは接触期間が短期か長期か、接触の度合いが強いか弱いか、接触の結果生じる方向性が一方的か相互的かといった3つの要素を明らかにしておきたい。

まず、接触の期間が長期か短期かを考察しよう。短期と長期の境界線は、どこにあるのだろうか。秋山(1992)に従うと、心理学の視点からみた異文化適応の長期というのは3, 4年となる。民族接触における長期と短期の境界線を、心理学の視点と同様に考えることはできないかもしれないが、保安族とチベット族との接触が、そうした3, 4年という短期間ということはあるまい。

16世紀の標準的なチベット語アムド方言を記録した西番館訳語A(西田(1969))をみると、チベット語のより古い段階をする音連続 閉鎖音+r に反り舌音化の芽生えが認められるが、保安語大河家方言におけるチベット語アムド方言来源の借用語のなかにはその反り舌音化以前の段階を反映していると考えざるをえない語が数例見いだせる。次の例における語頭の子音(連続)の対応に注目されたい<sup>3)</sup>。

保安語大河家方言	チベット文語	16世紀チベット語アムド方言	チベット語アムド方言
dermoŋ 「熊」	dred mo	dzeʔ	tʂemoŋ
tʂab 「甲」	khra b	khraʔ	tʂhap
tʂiso 「万」	khri-	khri phraʔ	tʂhə
ndəganə 「同じ」	'drabani	<sup>n</sup> dza	
ndzeje 「敵」	dgra ya		fdzaja
ndzəg 「龍」	'brug	<sup>n</sup> brul	ndzu

各群の最初の例「熊」と「同じ」にだけ、保安語大河家方言の語頭子音(閉鎖音)にチベット語のより古い段階の音連続 閉鎖音+r が反映されているとみてよい。保安語は、チベット語との接触を通じて自らの音韻体系のなかに反り舌子音の系列を取り入れたが、当初はそれを自らの音韻体系に従わせ、tʂab「甲」や ndzeje「敵」のように口蓋化子音の系列で取り入れたようである。そのため、保安語大河家方言の借用形式 dermoŋ「熊」と ndəganə「同じ」の語頭子音にチベット語アムド方言で生じた反り舌音が反映されているとすれば、なぜそれらの語頭子音に反り舌音や口蓋化子音が観察されないのか説明できなくなる。

こうした状況をみると、保安族とチベット族の接触の期間が、長期であることは疑う余地がなく、場合によっては400年以上にも渡るということになりそうである。

次に、民族接触の度合いについてみよう。19世紀に成立した比較言語学では、系統論を論じるときに改めて借用する必要性のない基礎語彙という概念が重要であった。基礎語彙には身体名称語、数詞などが含まれるとされる(たとえばハールマン(1985))が、数詞は

バンベニスト(1983)や橋本(1978)が指摘するように経済活動という必要性に応じて、容易に取り替えられるものである<sup>4)</sup>。しかし、身体名称語には数詞にみられるような拘束もなければ、また文化語のように新たに借用する必要もない。そのため、身体名称語の借用状況は十分に民族接触の度合いを計る指標となりうる。身体名称語の借用が少なければ民族接触の度合いは弱く、逆に身体名称語の借用が多く、しかもそれが重要な部分に及べば及ぶほど、民族接触の度合いを強い所に位置づけることになる。

保安語大河家方言のなかから、チベット語アムド方言起源の身体名称語を探してみよう。保安語大河家方言には、次のようにチベット語アムド方言起源の身体名称語が多数見いだせる<sup>4)</sup>。

dzambə 「ほほ」 dzisga 「筋肉」 gəna 「頸」 gəna ɕo 「首筋」 gesəg(jason) 「頸の第1脊髄」 gabə 「背」 hoŋoŋ 「身体」 χæci(jason) 「寛骨」 kabsə 「あごひげ」 luə 「大腿部」 natəχ 「喉」 ŋganəχ 「脊髄」 ŋgasəg 「背骨」 raŋu 「毛髪」 saŋre 「存骨」 servə 「脾臓」 səktə 「四肢」 sig 「関節」 ʂgaŋ 「骨髓」 (kuol)ti 「足の裏」 tɕag 「血の塊」 tɕova 「犬歯」

しかもここには、dzambə 「ほほ」、gəna 「頸」、gabə 「背」、hoŋoŋ 「身体」、natəχ 「喉」といった身体部位のなかでも重要な部分が含まれている。こうした身体名称語の借用量の多さと重要な部分への借用は、保安語とチベット語との接触の度合いが強い所に位置づけることを端的に物語るとみてよい。そのほか身体に関わる語として、身体の機能や特徴を表す katci 「唾液」、osga 「呼吸」、sirag 「垢」、səga 「容貌」、səmia 「あざ」が認められる。

一方、接触の結果生じる方向性については、対等とはいえないが、チベット族から保安族への一方的といえるものでもない。それは、チベット語アムド方言起源の婚姻に関わる借用語が保安語大河家方言に見いだせることからわかることである。保安語大河家方言には、少なくとも adz/zaŋ 「妻の実家」 gəni 「嫁ぎ先」 hamnoŋ 「嫁の実家」といったチベット語アムド方言起源の婚姻に関わる借用語が認められる。

馬(1989)に従うと、異教徒の関係にある保安族(イスラム教徒)とチベット族(チベット仏教徒)との婚姻は、保安族の嫁不足が要因であったため、保安族の男性とチベット族の女性との間にだけ成立し、チベット族の女性は婚姻後チベット仏教からイスラム教への改宗が求められたという。つまり、チベット族の側からみると、結婚した女性には宗教を始めとして生活様式に大きな変化が生じ、その家族には保安族との間に姻戚関係が結ばれたことになる。こうした状況をみれば、保安族とチベット族との民族接触を一方的と捉えることはできないのではないだろうか。ただし、残念ながら、保安語がチベット語アムド方言に何らかの語を借用語として提供したかどうかはわからない。

以上のように、保安族は、清代同治年間に青海省黄南藏族自治州同仁県から現在の居住

地に移動してくるまでの期間、チベット族との間に長期で、密度も濃く、しかも一方的に影響を受けただけとはいえない接触を持っていたようである。とすれば、保安族へのチベット族の文化的影響は、様々な分野に及んでいることが予想される。実際、その通りであるが、次節でさらに、借用語の意味分野の特定を通じて、保安族がチベット族との間にどのような文化交渉を持っていたのかを考察していこう。

#### 4. 意味分野からみた文化接触

保安語大河家方言から取りだせるチベット語アムド方言来源の借用語をみると、チベット族から保安族への影響は、単に衣食住といった物質的な面にとどまらず、社会制度や精神活動にまで及んでいたことを想像させるものである。文化要素についてはいろいろな分類があるが、以下では衣食住、生業、婚姻、政治、経済、軍事、宗教、医療といった項目をたて、保安語大河家方言がチベット語アムド方言から取り入れた借用語の意味分野をみていくことにしよう。

##### 4. 1 衣食住

保安語大河家方言がチベット語アムド方言から借用語として取り入れたもののうち、衣食住関連では、次のものが見いだせる。

- 衣 : dzaxtu 「裏に毛皮がついたコート」 laxci 「手ぬぐい」 lambə 「つぎあて」 momog 「綿花」 ndabkə 「裾」 como 「帽子の1種」 tšəg 「毛織物」 tšəgla 「雨具」
- 食 : ɕo 「馬乳」 tɕyra 「酸乳からとった凝乳の1種」 jemə 「ごはん」
- 住 : ndu 「ほこり」 dzanjkə 「へい」 kanɕər 「木房」 mardzig 「入り口の敷居」 jerdzig 「入り口の鴨居」 rikər 「テント」 ɕa 「中庭」 tabkə 「かまど」 saŋ 「家」

##### 4. 2 生業

生業関連では、チベット族から保安族が鍛冶、牧畜、農業を学んだことを想像させる借用語が取り出せる。これらのうち、鍛冶と牧畜には保安語大河家方言の語彙のなかから多数のチベット語アムド方言来源の借用語が見いだせるが、農業の場合耕作を学んだことを示す logmə 「耕作」以外の借用語は今のところ認められない。こうした事実は、保安族の文化がチベット族のそれより牧畜や鍛冶の面では劣位であったが、農業の面では優位であったことを想像させる。

では、チベット語アムド方言からの借用語が多数見いだせる鍛冶と牧畜のうち、まず鍛冶関連の語をみよう。保安族の鍛冶は有名であるが、次のように鍛冶に従事する人を始め

として、それに不可欠な金属、工具、製品を表す語が取り入れられている。

従事者：ngorə「鉄匠」

金属：dzəŋsəm「紅銅」 jənə「鉛」 tɕor「銑鉄」 gəja「錆」

工具：laχtɕi「工具」 dzɪta「金敷」 tova「金槌」 godzir「つるはし」  
saχdər「やすり」

製品：ɕaŋlaŋ「刀」 ɕib「刀の鞘」 soχli「のこぎり」

次に、牧畜関連をみると、馬、駱駝、山羊、牛、放牧地などに関わる語がチベット語アムド方言から保安語大河家方言に取り入れられている。このなかで特に注目されるのは、馬に関連する語の多さである。借用語の領域は、次のように名称、馬具、身体部位、走法などに及ぶ。

名称：(mori)dombə「(馬)群」 guormə「3歳牝馬」 χsəb(morə)「牡馬」  
nguormo「牝馬」

馬具：golo「腹帯」 kamər「くつわ」 ned「しりがい」 ngə「荷鞍」 ngerə  
「鞍橋」 obtɕan「あぶみ」 ɕadag「鞍ひも」 ɕamtə「端綱」 dzogdzog  
「家畜を結ぶ紐」 ʂabdzog「手綱」

身体部位：ngocmə「たてがみ」 galpə「馬の額に沿ってある白斑の毛」 nokə「ひづめ」

走法：gombə「踊走」

その他：ngawa「鞍傷」 daləg「馬糞」

また、駱駝、山羊、遊牧地に関わる語では、チベット語アムド方言から保安語大河家方言へと取り入れられている。

駱駝及び：ŋaməŋ「駱駝」 nadəg「鼻につける小さな縄」 raŋu「牡山羊」 raɕib

山羊「去勢山羊」 riməg「糞」

牛：valəŋ「牛」 galəŋti「3歳牝牛」 ɕarmo「3歳牝牛」 dzopə「反芻動物の胃」

放牧地：doŋsa「秋営地」 nguŋsa「冬営地」 ɕisa「春営地」

その他：ra「家畜の囲い」 ro「家畜の死体」

#### 4. 3 婚姻

保安語大河家方言には、先に述べた通り、チベット族との間に婚姻が成立していたことを物語る次のような借用語が取り入れられている。接触の影響が、保安族からチベット族にも及んでいたことを示すものである。

婚姻：adz/zaŋ「妻の実家」 gəni「嫁ぎ先」 hamnoŋ「嫁の実家」 ɕenə「親族」

そのほか、人間関係を表す語として保安語大河家方言は、チベット語アムド方言から次のような語を取り入れている。

人間関係：dzarə (kuŋ)「青年」 niraŋ「祖先」 ndzɛje「敵」 rogsa「恋人」  
tɕanti「孤児」 tɕimsaŋ「家族」 tɕimsi「近所」 jaadzi「子供」

#### 4. 4 政治、経済及び軍事

保安族へのチベット族の影響は、政治、経済さらには軍事にまで及んでいたようである。そうした点を想像させる借用語として、保安語大河家方言から次が取り出せる。

政 治：dog「ジンス」 gədəmbə「元首」 gombo「役人」 ndeva「村落」 sova  
「部落」  
経 済：dom「債務」 galasa「賃金」 ndzi nombə「財産」 ser「お金」  
軍 事：tɕab「甲」 ndoŋ「やり」

#### 4. 5 宗教

イスラム教徒である保安族全体が、チベット仏教に改宗することはなかった。しかし、保安語大河家方言からは多数のチベット仏教に関わる借用語が見いだされ、チベット仏教に改宗することのなかった保安族にもチベット仏教の影響はかなり浸透していたことを想像させる。保安語大河家方言から、次のようなチベット語アムド方言来源の借用語が取り出せる。

チベット：akə「ラマ」 atɕi「香」 dapə「信仰」 dzomo「尼僧」 gədzan「袈裟」  
仏 教 gurəm「儀式」 kadag「ハダク」 katɕim「遺言」 labdzo「画家」(agu)  
lajil「仙女」 mane「経典」 mo「占い」 mbog「仏」 namɕoŋ「魂」  
nierva「寺の財政を司るラマ僧」 ŋgambə「主教」 tɕam「チャム」  
rəmbotɕə「宝物」 vande「修道僧」

#### 4. 6 医療

保安語大河家方言には、保安族がチベット族から医療をも学んだことを想像させる借用語も見いだせる。

医 療：man「薬」 manbə「医者」

そして、医療に関連する病気を表す語として、保安語大河家方言には、次のような借用語がある。

病 気：guor「炭疽熱」 makə「傷」 maru「壊疽の傷」 ŋgo「疥癬」 tɕisər「膿」

ところで、保安語大河家方言には、そのほかにも自然現象、自然景観、動物、植物、言語伝達、時空間、精神活動などといった意味分野にチベット語アムド方言来源の借用語が



観察される。そのなかで数が多いは、人が居住する場所が変われば容易に消滅したり、取り入れられたりする次のような自然現象、自然景観、動物や植物に関わる語である。

自然現象：çitgə「春」 ger「夏」 donkə「秋」 ŋguŋ「冬」 tçolog「洪水」 mokə  
「霧」 dzaxtu「災害」 vad「霜」 sijo「露」 tçar「雹」

自然景観：donɕi「湖」 godoŋ「山の背」 kəg「峡谷」 natɕi「塩沢地」 ŋgaŋ「峠」  
palon「岩石」 satçə「地形」 çergaŋ「島」 taŋ「平原」 tçyku「温泉」  
so「海」

動 物：dermoŋ「熊」 doməraku「蜘蛛」 ga「狐」 gajaŋ「ヤク」 gədzəg「豹」  
gəla「麝香鹿」 gəlanɕi「象」 ndzəg「龍」 ŋgodə「ハゲタカ」 şam  
「川獺」 rədəg「野獣」 sɛŋgə「ライオン」 çabraŋ「土蜂」 çaji「鳥」  
ça「鹿」 tça「鷹」 tçimo「雄犬」 çaxə「羽」

植 物：(tçiχaŋ) doχə「白樺」 dzombə(çu)「松」 dzaŋma「柳」 çugə「ネズ」  
matəχ「花」 dzapə「根」 nəma「穂先」 ra/aagə「枝」 raləg「小枝」  
taŋɕi「松ヤニ」

以下に、言語伝達、時空間、精神活動に関わる語を掲げておく。

言語伝達：gatɕi「ことば」 χocib「嘘」 kua「うわさ」 lan「回答」 nda「合図」  
dag「標識」 ti「印鑑」

時 空 間：çiro「午後」 naŋɕi「正午」 çaŋ「方面」 çog「方向」

精神活動：dondog「事情」 gopə「方法」 landzəg「面倒」 naŋna「嫉妬」 ndəg  
「苦しみ」 roko「知恵」 sɛm「心」 sɛmdəg「苦難」

## 5. 借用時期における若干の考察

借用語を論じるときには、意味分野のほかにも借用の時期という興味深い問題がある。この問題について若干触れておこう。そのためには文字で書かれた資料があればよいのであるが、保安語のように文字を持たない言語にそれを望むことはできない。しかし、第3節でみたように、借用語の形式からいくつかの語の間に借用の相対的順序を想定することは可能である。

そうした観点から保安語大河家方言におけるチベット語アムド方言来源の借用語を調べてみると、チベット語のより古い段階の語頭子音はある条件のもとアムド方言で無声音化しているため、次のような状況が見いだせる。

チベット文語	チベット語アムド方言	保安語大河家方言	
zama	sama	jəmə	「ごはん」
zangs ma	saŋma	dzaŋsəm	「紅銅」

zil ba

siwa

sijo

「露」

上は、チベット語のより古い段階の有声摩擦音 *z-* はそれに何ら子音が先行しない場合、アムド方言で無声音化し無声摩擦音 *s-* に発展したが、保安語大河家方言の借用形式ではそれに *j-* が対応する場合と、*dz-* が対応する場合と、*s-* が対応する場合の3通りがあることを示した例である。保安語大河家方言のうち、最初の2例 *jəmə* 「ごはん」と *dzaŋsəm* 「紅銅」には、チベット語アムド方言にまだチベット語のより古い段階の有声摩擦音 *z-* の無声音化が生じていない段階が反映され、最後の語例 *sijo* 「露」にはそれが生じた以降の段階が反映されている。そして、最初の2例に見いだせる保安語大河家方言の取り入れ方の違いは、両者ともチベット語のより古い段階の有声摩擦音 *z-* を反映するとはいえず、借用の時期に関して、元々モンゴル系の言語に許容されていた *j-* を語頭にもつ *jəmə* 「ごはん」の方がそうではない *dz-* を語頭にもつ *dzaŋsəm* 「紅銅」より早いということを示しているのであろう。

並行した事例は、チベット語のより古い段階の有声摩擦音 *zh-* (*by-* からの口蓋化も含む) がそれに何ら先行子音を伴わない場合、アムド方言で無声摩擦音 *ɕ-* に発展した場合にも見いだせる。

チベット文語	チベット語アムド方言	保安語大河家方言	
zhane	ɕape	jene	「鉛」
zho	ɕo	ɕo	「馬乳」
bya gzhi'u	ɕaji	jaadzi	「子供」
bya	ɕa	ɕaji	「鳥」

ここに取り上げたような例の場合、語頭に *j-* や *dz-* をもつ形式の方が、語頭に *s-* や *ɕ-* をもつ形式よりも早く保安語大河家方言のなかに取り入れられたとみてさしつかえないだろう。しかし、これらの例がそのまま文化変化の過程を表しているとはいえないようである。それは、現在語頭に *s-* や *ɕ-* をもつ語であっても、チベット語アムド方言で無声音化が起きる以前に、まずは語頭に *j-* や *dz-* をもつ形式で取り入れられ、その後に取り入れられた *s-* や *ɕ-* をもつ形式が古い借用形式を駆逐したという可能性を考察の外に置くことはできないからである。とすれば、借用形式において確かなのは、より古い借用形式をもつ語は受け手側の言語により早く取り入れられ、その形式がそのまま定着したということのようである。

## 6. おわりに

以上、保安語大河家方言に観察されるチベット語アムド方言来源の借用語から、保安族がチベット族との間にどのような民族接触をもっていたのかをみてきた。

保安族とチベット族との民族接触の形態は、期間、度合い、方向性から次のような状況であつたらしい。接触の期間は、借用語の形式が示すように場合によっては400年以上にも渡る長期である。接触の度合いは、多数のしかも重要な部分にまで及ぶ身体名称語によって裏付けされるように強い。そして、接触の方向はチベット側から保安族への一方通行ではなく、婚姻に関する借用語が示すように保安族からチベット族への影響もあった。

そして、保安族へのチベット族の影響は、借用語の意味分野が示すように単に物質的な面にとどまらず、社会制度や精神活動にまで及んだことを想像させる。そのなかでも特に注目されるのは、牧畜と鍛冶に関わる語の多さである。青海省に住んでいた当時の保安族が、牧畜や鍛冶に疎かったと単純に考えたくなるのであるが、はたしてどうなのだろうか。

\*) 本稿は、平成7年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(A))の交付を受けて行った研究成果の一部である。

#### 註

- 1) 保安族の人口は、胡主编(1991)による。
- 2) 借用語の語彙リストは、別の機会に発表する予定である。
- 3) 表記はIPAに従い、出典を一部改めた。
- 4) 保安語大河家方言の数詞は、孙主編(1990)をみると「千」と「万」にチベット系の数詞が認められるが、布和・刘(1982)では「千」と「万」は漢語系となっている。
- 5) 括弧内は、モンゴル系や漢語系などの語を示す。

#### 参考文献

- 布和・刘照雄(1982)『保安語簡志』民族出版社
- 胡国兴主编(1991)『甘肃民族源流』甘肃民族出版社
- 马少青(1989)『保安族』民族出版社
- 陈乃雄(1990)「保安族的语音和词汇(续)」『西北民族研究』1, 32+33-48
- 孙竹主编(1990)『蒙古語族語言辭典』青海人民出版社
- 秋山剛(1992)「異文化と旅 -外なる旅と内なる旅-」星野命編『異文化間關係学の現在』30-47, 金子書房
- ハールマン, H [早稲田みか 編訳](1985)『言語生態学』大修館
- バンベニスト, B [岸部道雄 監訳](1983)『一般言語学の諸問題』みすず書房
- 橋本萬太郎(1978)『言語類型地理論』弘文堂
- 西田龍雄(1969)『西番館訳語の研究』松香堂
- 大島稔(1989)「アリュートの言語資料よりみた民族接触に関する諸問題」北方民族・文化研究会編『民族接触 北の視点から』88-99, 六興出版